

枕団子と死者の想い

山田慎也

Makuradango and Thoughts of the Dead

YAMADA Shin'ya

- ① 作法書にみられる枕団子
- ② 民俗研究における位置づけ
- ③ 死者の寿命をよむ団子
- ④ 団子と新たな死者
- ⑤ 饗供と死者の命運

【論文要旨】

枕団子は、枕飯とともに死者の供物として用いられ、作法書などにも取り上げられている。また、東京などでは葬祭業者が用意することもある。さらに、各地の事例をみると、そのあり様は変化に富んでいる。従来、白の廻し方や粉の作り方、かまどの使用法など通常の作り方とは異なる特別な製法や、その数などについては、民俗研究の中で注意が払われてきた。だが今回主題とする、団子の色の変化などを通して死者の想いや寿命を占う民俗については、研究上ほとんど触れられることがなかった。

こうした要因について、柳田国男の指摘がその後の方向に大きな影響を与えたと考えられる。柳田は、共食と忌みの観念について、死者の食べ物はそれを分けて食べることによって特別な効果が及ぶことで、それを分け与える人と、受け取らない人の区分が生じてきたと理解し、枕団子は死者への食物の一つとして枕飯とほとんど同一視していた。そしてその後の研究において、枕団子自体に注目したのは、五来重など一部の人々であった。五来は枕飯を死者のための鎮魂のための依り代とし、枕団子を死者以外の

邪霊的な存在に対する饗供とする視点を打ち出すことで枕団子の性格を分析した。

ところで、民俗誌をみると秋田県を中心に青森県、山形県において、枕団子の色が黒くなると、死者の寿命であったと判断する地域が多い。その一方で、黒くなると死者の心残りがあつた、悔いが残っているなど、死者の想いを判断する地域もあつた。この判断は対照的ではあるが、死をめぐる残された生者の評価であり、死者の想いを生者がさまざまに思い描くことで、死んだという事実を受容する一つの民俗であつたと考えられる。

さらに枕団子の変化によって新たな死者が生じるかを判断する伝承もあり、このような信念は、五来にいうように枕団子が邪霊的なものに対する饗供であり、死者の命運を知りえる存在であることを想像させるものであり、枕団子についての更なる検討が必要であると考えられる。

【キーワード】 枕団子、忌み、死、供物、死の受容